

「現代の小農」にとって適正規模とは

前号の特集「小農の使命」は大きな反響をいただいた。

現政権が声高に掲げる「規模拡大」「輸出」「攻めの農業・強い農業」などへの違和感が、大きなうねりになりつつあるのが感じられる。

だがいっぽうで、「現代の小農」は、経営規模をどうするかという課題と、今まさに向き合っているのだということも感じられた。

TPPの代償にと、政府が大型予算を組んでいる。

規模拡大・投資拡大への誘導補助金はますます厚くなりそうだ。

まわりでは農業をやめる人が増える。

そんななかで、「現代の小農」が考える適正規模とは……？

今号も農家の声を、小農の矜持とともにお伝えしたい。

津波被災後、20頭で酪農再開した若者の話

宮城県南三陸町・日向牧場 阿部俊幸さん

文 編集部

20頭だと補助金が出なかった

阿部さんは1987年生まれの29歳。22歳のときに家の酪農を継いだ。牛舎は20頭規模。朝晩の作業は両親も手伝うが、メインの作業は1人だ。経営を引き継いだ頃は赤字が続いていた

が、黒字化させるべく草の成分分析を行ない、エサの設計などを見直した。2年ほどでようやく黒字の見通しが立った矢先に震災が起き、津波で自宅も牛舎もすべて流された。

削蹄師などの仕事はしていたが、牛舎を再建して酪農を再開できたのは、震災から4年半後



阿部さんの自宅と牛舎があるのは
は海拔約10m、海岸から1.6km。
津波は3kmも川を遡上した